翻　訳

翻訳イクバール著『自我の秘密』その（1）

片岡　弘次（大東文化大学名誉教授）

Translation of Iqbāl's *Asrār-e Khodī*, No.1

Hiroji KATAOKA

要旨

イクバール（1877～1938 年）はパキスタンの建国詩人といわれている。その詩作はイギリス留学前、留学中、留学後の三つの時期に分けられる。留学以前はインドは一つの考えを示し、留学中の 1905 年より 08 年ではイスラーム世界の衰退を示す詩となり、帰国後より晩年に到る詩はイスラーム世界の覚醒と復興を願うものであった。

イクバールは詩の書き始めより晩年に到るまでウルドゥー語での詩作を続けたが、詩集として出版したのはペルシア語でのこの詩集『自我の秘密』（1915 年）が最初であった。

そこにはイスラーム世界の人々を衰退から復興させようとするイクバールの自我の哲学が見える。この自我の哲学はイクバールの留学後から晩年に到るまでの詩の中心思想となるものである。

この『自我の秘密』の翻訳紹介は 3 回で完結する。今回はこの詩集はどういうものかと語る序論と、自我についてさまざまな角度より述べている第 1 章より第 6 章までの部分である。

目次

序論

第Ⅰ章　世界の体系の基礎は自我に基づいている。そしてすべて個人の生活の連続は自我を強化することによりある。

第Ⅱ章　自我の確立は理想を作ることによって可能である。

第Ⅲ章　自我は愛によって強化される。

第Ⅳ章　請うことで自我は弱くなる。

第Ⅴ章　自我が愛によって強化されるとそれは宇宙の表われている力や隠れている力を支配する。

第Ⅵ章　被征服民が征服者を弱体化させる方法は征服者の自我を隠れた仕方で否定させることである。

自我の秘密

1．昨夜　神秘主義の老師が灯明を手にして町中を歩き回りながら言っていた。
　「わたしは野獣や獣が嫌になった。わたしは人間に恋い焦れている。
2．愚図ぐずしている同行者にはうんざりしている。
　(1) 神の獅子やあの物語の (2) 英雄ロスタムのような人に恋い焦れている
3．わたしは老師に言った。「うんと探しました　だが見つかりません」
　すると老師は言った。「わたしはその見つからない者を恋い焦がれている」

（(3) モウラーナー・ジャラール・ウッディーン・ルーミー）

自我の秘密

序論

わが森の乾いた木や湿った木になんの不足や欠陥もない
説教壇になれない棗椰子の木はわが絞首台用にする

（(1) ナズィーリー・ネシャープーリー）

I

1．世界を輝やかす太陽が夜の道を (1) 急襲すると
　わが涙は花の顔の上に水を注いだ。
2．わが涙が (2) 水仙の目から眠りを払うと
　緑はわが (3) 騒ぎのせいで目覚め始めた。
3．庭師はわが詩の力を試そうとした
　(4) 詩の一行を蒔き、剣を刈り取った。
4．庭師は花園にわが涙の粒のほか何も蒔かなかった
　それはわが嘆きの縦系を庭の横系と (5) 合わせた。
5．(6) わたしは粒子であるが輝く太陽もわたしの物である
　わが襟の中には (7) 数百の朝が隠されている。
6．わが (8) 埃は (9) ジャムシード王の杯より明るい
　それはまだ宇宙に現れて来ていない物まで知っている。
7．わが思考力はその羚羊を革ひもで鞍に縛り付けている
　今まで無の世界から外に現れて来ていなかった羚羊を。
8．今まで生えて来なかった緑がわが思考の花園の飾りである
　今も枝から咲き出て来ていない花がわが裾に隠れてある。
9．わたしは歌舞音曲の宴を目茶苦茶にしてやった
　わたしは (10) この世の血管の弦を琴爪で掻き鳴らしてやった。
10．わが本性の楽器リュートは (11) 珍らしい調べである

---

(1) 第 4 代正統カリフ・アリー（在位 656～61 年）の別称でその勇敢さで有名。
(2) ペルシア詩人フィルダウスィー（934～1025 年）による民族叙事詩『シャー・ナーメ』の登上人物の一人。
(3) ペルシア文学最大の神秘主義詩人（1207～73 年）。
(1) イラン生れのペルシア語詩人。ムガル帝国皇帝アクバルなどに仕え 1612 年インドにて没。
(1) 朝になる。
(2) 怠惰な人々。
(3) 嘆き。
(4) 剣が切りながら進むように、イクバールの詩作は人々に影響を及ぼし始めた。
(5) わが詩やメッセージがイスラーム共同体に寄与された。
(6) その詩の力は太陽と同じ。
(7) 将来におけるイスラーム共同体の輝き。
(8) 気質や眼識。
(9) 古代ペルシア王の杯。全世界を映したと言われる。
(10) 人生の真実に人々の目を向けさせた。
(11) 以前なかったメッセージがある。

[12] わが同僚はわが歌が分からない。
11. わたしはこの世で生れたばかりの太陽である
わたしはこの天の仕方をまだ見たことがない。
12. 星々はまだ[13] わが輝きから逃げているようには見えない
わが水銀はまだ[14] 混乱していない。
13. 海はわが[15] 光の踊りから恩恵を得ていない
山は[16] わがヘンナの色から恩恵を得ていない。
14. 時代の目は[17] わたしを見慣れていない
わたしはわが[18] 反動の恐れで震えている。
15. わが朝は東に着いた　そして夜が終った
[19] 世界の花の上に新しい露が降りた。
16. わたしは[20] 早起きの人を待つ
おめでとう　[21] わが火を崇拝するゾロアスター教の人よ。
17. わたしは[22] 歌だ　琴爪には御構い無しの
わたしは明日の詩人の声だ。
18. わが時代には[23] 秘密を知っている者がいない
わが[24] ユースフはこの市場のためではない。
19. わたしはわが[25] 古い友に絶望している
わがシナイ山は燃えている　[26] カリームが来るのを待ちながら。
20. わが友の海は露のようで[27] 台風がない
[28] わが露は海のような台風を肩にしているのに。
21. わが歌の関係は[29] 別の世界とである
[30] この鈴のために別の隊商がある。
22. なんと多いか　死後に詩人として生まれる者が
自分で目を閉じてからわれわれの目を開ける者が。
23. [31] 無から誇りとなる物を持ち出してくる
自らの墓の土から花のように咲き出てくる。
24. この砂漠を[32] 多くの隊商が通り過ぎた
みな[33] 駱駝の足取りのように音を立てずに過ぎた。
25. わたしは共同体に恋している　嘆くことがわが信仰である

---

[12] イスラーム共同体の人々。
[13] 共同体はその輝く思想を知らないので。
[14] それらの魂の中に不安はまだ生まれていない。
[15] 波に当たる太陽の光で波が踊っているように見える。
[16] 山が太陽の光を受けるとヘンナの色（赤黄色）になる。だが海にしろ山にしろ、即ち共同体はわがメッセージに気付いていず変化を起していない。
[17] わがメッセージ。
[18] わたしのメッセージに対する人々反応。
[19] 共同体がわが詩から影響を受けて。
[20] イクバールの詩を理解する人。
[21] ゾロアスター教とはイラン人大多数の宗教で火を崇拝する宗教。わが火とはわが詩の意。
[22] 詩人。
[23] 人々は真実を知らされていない。
[24] 預言者ユースフはただ同然で売り払われていた。クラーン第 12 章 20 節参照。
[25] イクバールの時代の詩は無目的で、更にイクバールの詩が理解されていないので。
[26] その詩が理解されるようになること。なおカリームとは預言者ムーサーのこと。クルアーン第 28 章 29 節参照。
[27] 共同体の中に革命を起させる激しさがない。
[28] わが詩は当時の人々とは違って革命的であるのに。
[29] 美や愛、花や鶯の世界ではない。
[30] イスラーム共同体を覚醒させるために。
[31] そのような詩人は。
[32] たくさんの詩人たち。
[33] 駱駝は音を立てずに歩む。そのように詩が革命を生むものにはならなかった。

わが[34]先払いで終末の日の混乱がある。
26. わが歌は弦の限度を越えて優れている
わたしはわが[35]ウードの壊れが気にならない。
27. [36]滴はわが[37]洪水を知らない　それもよい
[38]海はその混乱で荒れ狂うものになる　それもよい。
28. わが波立つ海は小川に収まり切れない
わが台風のためには海の海が必要である。
29. 生長して[39]花園にならない蕾は
わが[40]春の雲に価しない。
30. わが命の中には[41]稲妻が眠っている
山や砂漠はわが[42]競技場の門である。
31. もしあなたが砂漠ならわが[43]海を制圧せよ
もしあなたがツール山ならわが[44]稲妻を自らの中に吸収せよ。
32. わが運命の中に[45]生命の泉が書かれている
わたしは[46]人生の秘密を知らされている。
33. わが声の熱で粒子は[47]生を得た
それは羽を広げて螢となった。
34. わたしが述べている[48]秘密を誰も言わなかった
誰もわが思想のように意味の真珠の紐を通さなかった。
35. もし永遠の真実を知りたいなら来たれ
[49]大地を求めるなら来たれ。
36. 運命はわたしにこの秘密を語った
[50]友から秘密は隠せないと。

Ⅱ
37. 酌人よ立て　[51]酒を杯に注いでくれ
心から今の世の[52]刺痛を取り払ってくれ。
38. その水源が[53]ザムザムの泉である酒の災を与えよ
それを[54]求める者は乞食でもジャムシード王である。
39. その酒は思考力において鋭さを生む

---

(34) イクバールの夢は偉大なイスラーム共同体を完成させることにある。その詩が社会の中に最後の審判の日のような混乱を起させている。
(35) 弦楽器の一種。わが詩は力強く弦を切る程である。
(36) 詩が出来ず能力や勇気のない者。
(37) イクバールの詩。
(38) 賢人。賢人がイクバールの詩の影響を受けて大騒ぎをする。
(39) 読んで読者の心を拡大させない詩。
(40) 読む価値がない。
(41) イクバールの詩の中には偉大な力がある。
(42) 努力。
(43) 海の水を砂漠が吸い込むようにわが思想を吸い込め。
(44) 勇敢な人だけがわが詩を受け取ることが出来る。ムーサーはシナイ山で神の光に耐え切れず失神する。クルアーン第 7 章 143 節参照。
(45) 人生の真実。
(46) イスラーム共同体の魂。
(47) 共同体が覚醒された。
(48) 革命の方法
(49) 宇宙を征服したいなら。
(50) イクバールの言うことは神からの委託であり、それ故共同体には隠せないと。
(51) 預言者ムハンマドへの陶酔の愛。
(52) その愛があれば除去できる。
(53) カアバ聖殿の中にある泉。その水は酒と同じ効き目を持つ。
(54) イスラーム共同体の者。

覚醒の目をより多く覚醒させる。
40. その酒は干し草に山の威厳を与える
孤に獅子の力を与える。
41. その酒は大地にすばる星の高さを与える
滴に海の広さを与える。
42. 沈黙には最後の審判の日の混乱を与えよ
[55] うずらの足を鷹の血で染めさせよ。
43. 酌人よ立ってわが杯に[56] 生の酒を注げ
わが熟考の夜に月光を降らせよ。
44. わたしが迷える人々を目的地までに案内していけますように
傍観している人々に[57] 探究の気持が与えられますように。
45. わたしが新しい探究の道に[58] 早急に着けますように
人々の心に新しい願望を知らせられますように。
46. わたしは[59] 気力ある人々の目の瞳になろう
そして声のように世界中の人々の耳の中に消えていこう。
47. わたしは詩という物の[60] 価値を高めよう
わたしはわが目の涙を売り物の品物の中に加えよう。
48. わたしは再読しよう　ルーミーの恩恵により
[61] 諸学の秘密が封印されている本を。
49. その命は心の熱で一杯である
わたしが一瞬で消える輝きである時に。
50. 燃える[62] ローソクはわが蛾に攻撃を仕掛けてきた
[63] 酒はわが杯に夜襲を仕掛けてきた。
51. ルーミーはわが土を練金薬にした
そしてわが[64] ごみから多くの顕現を産んだ。
52. [65] 粒子は荒野の土で　旅の用意をした
[66] 大陽の光線が得られるように。
53. わたしは波だ　その海の中に住もう
[67] 輝やく真珠が得られるまで。
54. その[68] 酒に酔っている　わたしは
人生をその[69] 息で生きたい。

Ⅲ
55. 昨夜わが心は嘆きで一杯だった
わが[70]「神よ神よ」の声で沈黙の中にも賑やかさがあった。

---

[55] うずらを鷹と闘かわせよ。今まで衰退と隷従の虜であったイスラーム共同体が革命と変革により前進するように。
[56]「アッラーの外に神はなし」（クルアーン第2章163節、3章2節など参照）の思想の酒。
[57] 今は目的地が示されていないので。
[58] イスラーム共同体のために。
[59] イスラーム共同体への苦痛を持つ人々。
[60] 気晴しのためでなく人々の覚醒のために書く。
[61] ルーミーは初期においては神秘主義であったが、彼自身の中に変革が起り共同体のために心を痛め、『精神的マスナヴィー』を著した。
[62] ローソクや酒はルーミー、蛾や杯はイクバールのこと。
[63] わたしを酔わせ革命の気持を起させる。
[64] ルーミーの『精神的マスナヴィー』がイクバールを情熱と悲哀の詩人にした。
[65] イクバールはルーミーによって。
[66] ルーミーの意。ルーミーは知識と知恵の海。
[67] ルミーからの恵み。
[68] ルーミーの高い思想。
[69] ルーミーの息。
[70] 悲しみと絶望の世界で神に助けを求める。

56. わたしは時代の悲しみの不平の台風を巻き起していた
[71] 空の杯のせいで嘆いている。
57. わが視覚の力は耐え切れなかった
翼を壊して [72] 眠ってしまった。
58. 神の本性を持つ [73] 師が夢の中でわたしに顔を見せた
ペルシア語でクルアーンを書いた師が。
59. ルーミーは言った　[74] 愛の狂人よ
愛の生の酒を [75] 一口飲め。
60. それで自分の [76] 肝臓の中に最後の審判の日の混乱を起せ
[77] 頭は酒のビンで割って目は乱切歯でつぶせ。
61. 笑いを百の [78] 嘆きの財にせよ
[79] 血の涙を肝臓の欠けらとせよ。
62. [80] いつまでおまえは蕾のように沈黙のままなのか
その匂いは花のように [81] 安く売れ。
63. おまえはおまえの裾に [82] 芸香の種のような騒ぎを持っている
それ故 [83] おまえは自分の駕籠を火に結びつけよ。
64. 鈴のように体のすべての部位から叫びを出せ
静かな叫びを [84] 外に出せ。
65. おまえは火である　世界の宴を明るくせよ
他にも同様におまえの熱で燃やせ。
66. [85] 酒売りの師の秘密を明白に述べよ
[86] 酒の波となれ　杯の衣装を身にまとって。
67. おまえは憂慮の鏡のため [87] 石となれ
[88] 瓶を通りで粉々にせよ。
68. 葦原から葦笛のようにメッセージを出せ
[89] カイスにライラーの部族からメッセージを出せ。
69. [90] 嘆きに対して新しい方法を創造せよ
宴を叫びで一杯にせよ。
70. 立て　[91] 新しい命を生きている者に与えよ
自らの立ての言葉で生きている者を更に生き返らせよ。

---

[71] 心が愛や霊的認識から空の状態。
[72] 疲れ果てて。
[73] ルーミーが。
[74] イクバールよ。
[75] 唯物主義や合理主義から離れ、精神主義になっていることを示すために。
[76] 力の源となる所。
[77] 知識や哲学は役立たない。愛と直観が重要。
[78] 嘆きに変えよ。
[79] 涙は心を明るくする。
[80] 共同体のため早急にメッセージは伝えよ。
[81] 広がれ。
[82] 邪視を追い払うため、この煙をたく。
[83] 自分の中に起きている騒ぎを外に表わせ。
[84] 共同体のために。
[85] ルーミーが唯一の神とムハンマドを通して得た感動。
[86] メッセージの熱で共同体を努力に向かわせる。
[87] 確信の力。
[88] 恐怖の象徴。
[89] カイスはネジド高原を恋人ライラーを求めてさ迷った男。ここではイスラーム共同体の意。ライラーは預言者ムハンマドへの愛。
[90] 以前の詩には嘆きが多かった。
[91] キリストはわたしの命で生きかえれと言った。クルアーン第 3 章 49 節参照。

71. イクバールよ立て　そして[92]新しい道に足を置け
　[93]古い詩作の情熱は頭から外に置け。
72. [94]話す喜びを知れ
　隊商の鈴である者よ　目覚めよ。
73. ルーミーのこれらの言葉でわが衣に火が付いた
　葦笛のようにわたしの体はさまざまな音に包まれた。
74. わたしは自分の弦で歌の調子を上げた
　わたしは自分の耳のために[95]天国を飾った。
75. わたしは自我の秘密から幕を上げた
　自我の奇跡の秘密を明らかにした。

Ⅳ

76. わが存在の絵図は下絵であった
　誰にも好かれず役立たず能力に欠けていた。
77. だが真の愛がわたしを鑢（やすり）に掛けてくれ、わたしは人間となった
　そして世界の諸事情を知る者となった。
78. わたしは天の神経の中に動きを見た
　わたしは月の血管の中に血の流れを見た。
79. 人間のためにわが目は幾晩も涙を流した
　人間の生活の秘密の幕を引き裂こうとした。
80. 可能性の工場の中から
　生の真実の秘密を明らかにした。
81. わたしは[96]人生の夜を月のように明るくした
　だがわたしは明るい共同体の足の[97]埃である。
82. その名声が[98]庭園や森で得られる共同体である
　[99]心の火はその新しい歌である。
83. その共同体は[100]粒子を蒔き太陽の収穫を得た
　そして数百人の[101]ルーミーや[102]アッタールを得た。
84. わたしは熱き吐息　天の方に昇って行く
　わたしは煙であるとはいえ　[103]火の家系である。
85. わが筆は高い思想の勇気である
　これら[104]九層の秘密を砂漠に投げ捨ててやった。
86. 滴が海と同じ大きさになるように
　滴が砂漠と同じ広さになるように。

Ⅴ

87. この[105]マスナヴィーによる目的は詩作の表現ではない
　語句の美しさや技法の素晴らしさを見せることでない。

---

[92] 民族の覚醒と前進。
[93] 愛や求愛、花や鶯。
[94] 民族を覚醒させる喜び。
[95] その声を聞くだけで酔う効力と魅惑で。
[96] わたしの詩で。
[97] イクバールの謙遜的な言い方。
[98] 世界中で。
[99] イスラームによって共同体の中に生じた情熱。
[100] 初期は少数のイスラーム改宗者であったが。
[101] ペルシア文学最大の神秘主義詩人（1207～73年）。
[102] ホラーサーン派神秘主義詩人（1145？～1221年）。
[103] 火や吐息は情熱の比喩。
[104] 宇宙の秘密を明らかにした。
[105]『自我の秘密』を書く目的。

88. わたしはインド人でありペルシア語を知らない
わたしは[106]新月であり　空(から)の酒杯である。
89. わたしに言い回しの美は求めないでくれ
わたしに[107]カーシャーンやエスファハーンを求めないでくれ。
90. ウルドゥー語は甘味が砂糖のようであるとはいえ
[108]ダリー語の言い方はもっと甘い。
91. わが思考はペルシア語の表現に魅了された
[109]わが筆はツール山の棗椰子の技となった。
92. ペルシア語はわが思想の高さにより
わが思考の性格と似合っている。
93. 賢人は　酒の入った水差しに文句を言うな
水差しに入った[110]酒の味に愛着を持て。

第Ⅰ章

世界の体系の基礎は自我に基づいている。すべて個人の生活の連続は自我を強化することにある。

Ⅰ
1．存在界は[1]自我の跡からある
あなたが見ている物は[2]自我の[3]秘密からある。
2．自我が自分を目覚めさせる時
[4]それはこの世界をはっきりと見させた。
3．その存在の中に多数の世界が隠れている
その立証でそれ以外の世界が明らかになる。
4．自我はこの世に敵意の種を蒔いた
そして自らを自身以外と考えた。
5．それは自分で[5]他の存在を準備する
争いの味を[6]増やそうとして。
6．完全な自我は自分の腕の力で[7]ある物を消滅させる
それが自分の力を気付くように。
7．その[8]誤魔化しこそが人生の実体である
バラの花のように血で小洗浄することがその人生の実体である。
8．一つの花のために百の花園が[9]血に染まり
一つの歌の足元から[10]百の嘆きが起る。

---

[106]新月の形は酒杯をひっくり返したようで、ひっくり返した酒杯の中には酒がない。わたしのペルシア語の知識は新月と同じようである。
[107]これら両地域から優れたペルシア語詩人が輩出している。カーシャーンはエスファハーンより北西約 180 キロの所。
[108]近世ペルシア語の母体になった言語。
[109]これらの思想はペルシア語で述べ、偉大さを得た。
[110]わが酒の本当のメッセージ。
[1] ここでの自我は高慢や自惚れのような一般的な意味でなく、人間の個の中に隠れている力や能力である。更に神の個と宇宙との関係の場合もある。
[2] 神の自我。神は自我の立証と強化のためにこの宇宙を生んだ。
[3] 表現。クルアーン第 5 章 105 節参照。
[4] 神は自らの表現のために世界を生み、その創造によって自らの偉大さを明らかにした。
[5] 敵。
[6] 自我は輝きを得る。
[7] その後、新しい物を作る。
[8] 完全なる自我即ち創造主は自らの表現と立証のために自分以外の物を作る。
[9] 廃する。
[10] 百の古い存在を消し一つの新しい物を作ることは自我の完成である。

9．一つの空のためそれは[11]百個の新月を持って来た
一つの語のため[12]それは百の話を創造した。
10. この[13]浪費と残酷さの言い訳は
[14]実質上の美の創造と完成である。
11. [15]シーリーンの美しさは[16]石工の苦しみの口実である
麝香鹿の腹の中の麝香の袋は[17]ホータンの多くの鹿の死滅の口実である。
12. 絶えざる燃焼は[18]蛾の運命である
燭台は[19]蛾の苦労の口実である。
13. その筆は今日の数百の絵を描いた
[20]来たるべき明日の朝を迎えられるように。
14. [21]その火は百人の[22]イブラーヒームを火の中に投げ入れた
一人の[23]ムハンマドの灯の明かりが輝やくように。
15. それは行為の目的のためになる
[24]ある時は行為者に　ある時は普通の人に　そして原因や理由となる。
16. [25]それは立つ　そそる　跳ぶ　恐れる
燃える　火を付ける　引き寄せる　死ぬ　吹きつける。
17. この時の広がりは[26]その競技場となっている
空は[27]道の埃の波に過ぎない。
18. 宇宙は[28]花草模様でその裾に花を付けている
夜は眠りにより　昼は覚醒によってある。
19. [29]それはその炎を火花に分けた
そのようにして部分に関心を置く教育を知能にした。
20. それはその個を壊し部分を生んだ。
しばらくして散り散りとなり砂漠の様子を生んだ。
21. また散らばり四散して嫌気が差した
そしてそれは個の中に縮まって山の姿を取った。
22. 自分自身を表し際立たせることは自我の本性である
全ての粒子の中に自我の力が眠っている。
23. 自我は沈黙した力である　しかし行為のために[30]不安である
それは行為のために諸々の理由の[31]束縛がある。

---

(11) 百回、新月になること。
(12) 自我は絶えず創造をし続ける。
(13) 一つの物を消して他を作ること。
(14) 美の完成と創造の行為を絶えず続ける。
(15) サーサーン朝の王パルヴェーズ・フスローの妻。
(16) 美貌のシーリーンに恋した石工ファルハード。
(17) 東トルキスタンこの地域で、ここの鹿は腹に麝香を持つ。
(18) 蛾は明かりを求めて燭台で身を焦がす。
(19) 苦労と破壊を絶えず続けて真の美が得られる。
(20) 今日の無数の破壊の後に真の美が完成する。
(21) 神の自我の火。
(22) 一神教を守る預言者でイスラームはそれを再興するもの。ニムルード王により火に投じられ殺されようとしたが神の力で火が花に転じた奇跡は有名。クルアーン第21章69節参照。
(23) イスラームの開祖。唯一神アッラーから選ばれた最後の預言者。
(24) 完全な存在の本質は自我である。その個の表現のためには他も必要である。
(25) 完全な自我はその表現のために様ざまな様子を取る。
(26) 自我の競技場。
(27) 活発な自我の動きによって掻き立てられて出来た波。
(28) すべての物の中に神の顕現がある。
(29) 完全な自我、即ち神。
(30) なんらかをするために。クルアーン第55章29節参照。
(31) 束縛を生むものも自我である。

Ⅱ

24. この世の人生の解決は自我の力による
[32]すべての個人の生はその自我の強度による。
25. 滴が自我の語句を[33]思い出すと
頼り無い存在が[34]真珠になる。
26. 酒は自我の弱さのせいで姿がない
その姿なしは酒杯に恩を着る。
27. 酒の酒杯は姿を整えているとはいえ
酒の酒杯はその回わし合いを[35]われわれから借りている。
28. 山は自我を忘れて砂漠となる
そして海の台風について不平を言うものになる。
29. 波は波の胸の中で[36]波である限り
波は自らを海の肩に乗せている。
30. [37]光は一つの円環を作り目となった
[38]顕現の探究で目が瞬きをした。
31. 緑がその中に[39]芽を出す力を得ると
その勇気は花園の胸を破った。
32. 蠟燭は自らを[40]鎖で縛った
そして自らを[41]粒子で作った。
33. 自分自身を溶かし始めると自我から遠のいた
そして結局[42]涙のように目から滴たり落ちた。
34. もし指輪の宝石がもともと堅固な物だったら
それは傷つくようなことはなかったであろう。
35. 今もしそれに他の名前が付けられると
[43]その肩は他の名前の重荷で[44]傷が付く。
36. 地球は自からの存在の上に確りと立っている
月には絶えず[45]回転する束縛がある。
37. 太陽の存在は地球のより強い
それ故地球は[46]東の目に魅せられている。
38. 鈴掛の木の魅力は瞬く暇もない程である
山はその木の壮観さに満ち溢れている。
39. [47]その衣服の縦系や横系は火のようである
[48]その元は反抗心のある種である。
40. 自我が人生の力を集約させると

---

(32) これらの例が 25 以下である。
(33) その中に生じると。
(34) 春の雲の雨の滴が貝に入ると真珠になると言われている。
(35) 酒の自我の弱さの証拠である。
(36) 自分の自我を知っていることになる。
(37) 自らを集めて。
(38) 目は自らを忙がしくさせたが視覚の富に満足した。
(39) 地面の中より芽を出すことは自我の強化である。
(40) 糸を芯にしてその回りを臘で固める。
(41) 臘。
(42) 自我の弱さの例である。
(43) 指輪の宝石の肩。
(44) 自我が弱い例。
(45) 自我の耐久力。
(46) 太陽のこと。
(47) 鈴掛の木。
(48) 種が地面から出て木になるためには自我の強さがある。

[49] 自我は人生の川より一つの海を流させる。

第Ⅱ章

自我の確立は理想を作ることによって可能である。

1．人生はその存続を目的に負う
目的は人生の隊商にとり出発を告げる鈴の音になる。
2．人生は探究に隠れている
その基礎は[1]願望に隠れている。
3．[2]心の中に願望を生かしておけ
あなたの体が墓場にならないように。
4．願望はこの色と匂いの世界の命である
すべての物の性格は[3]願望の受託者である。
5．[4]願望のせいで胸の中に心の踊りがある
その輝きで胸は鏡のようである。
6．願望は土にさえ飛翔力を与える
[5]ヒズルがムーサーの道案内になったように。
7．心は願望の熱で生を得る
心が生を得るとその中に[6]非アッラーの印が消える。
8．心が願望の創造を[7]止めると
その大きな羽は壊され飛べなくなる。
9．願望は自我のために[8]混乱を飾る
願望は自我の海の落着きのない波である。
10．願望は目的の獲物のために罠である
[9]それは仕事や業績についての帳簿の綴じ系である。
11．願望がなくなると生きた人間も死んだようになる
情熱がなくなると炎も消えてしまうように。
12．わが見ることの目の本質とは何か
わが見ることの快楽とは目の形を取った。
13．雉（きじ）は速い行動が好きで足を得た
夜鶯（ブルブル）鳥は鳴く努力で嘴（くちばし）を[10]得た。
14．竹笛が藪（やぶ）から外に出て名誉を得ると
歌はその監獄より自由の身となった。
15．新しい物を探し天まで達する能力とは何か
[11]それがこの奇跡を如何に得たかかつて考えたことがあったか。
16．人生は願望によって豊かになる
[12]知識はその腹から生れる。
17．民族の組織そしてその法や慣習は何か

---

[49] 自我を強化することで人間は強くなり、困難に立ち向うことが出来る。
[1] 宇宙の征服の願望。
[2] 読者に向って。
[3] 願望に沿って生を送れば豊かさが得られる。
[4] 心の純潔も願望になる。
[5] ヒズルと預言者ムーサーとの会見についてクルアーン第18章60節を参照。
[6] アッラー以外の物には重要性も地位もなくなる。
[7] 実行力を欠き自我がその力や能力を表すことが出来ない。
[8] この世の混乱や輝きは自我のせいである。
[9] 人間は偉大な願望によって業績を上げ、生存の永遠性を用意する。
[10] 絶えず続けた願望の創造とその努力によって得た。
[11] 今日この世界が成した進歩は知識のせいである。だがイクバールにとっては願望に較べれば、知識の価値は少ない。
[12] 知識は願望に較べればその重要性は少ない。

[13] 新しい様々な知識を生む秘密は何か。
18. 願望が自分の力で壊れると
[14] 心の中より頭を上げ何らかのスタイルを取る。
19. 手や歯　頭脳や目　そして耳　これらは何か
思考力や想像力　意識や記憶　これらは何か。
20. 人生が戦場で馬を走らせる時
自らの擁護のためにこれらを武器とした。
21. 学芸の目的は単に知ることでない
花園から花や蕾を得ることが目的でないように。
22. 知識とは人生を擁護する道具である
知識とは自我を強化する道具である。
23. 学芸とは人生の援助者である
[15] 学芸とは人生の奴隷女の子である。
24. さあ人生の秘密を知らない者よ　立ち上がれ
[16] 目的の酒を飲み陶酔して　立ち上がれ。
25. その目的は夜明けの朝日のようであれ
[17] アッラーに従わない者は焼き殺す者となれ。
26. その目的は空より高く
魅力的で誰にも好かれ美しくあれ。
27. その目的は古き偽りを消す物となれ
襟元には [18] 終末の日のような混乱の気持を込めて。
28. 目的の創造でわれわれは生きている
願望の輝きでわれわれは輝やいている。

第Ⅲ章

自我は愛によって強化される。

Ⅰ
1．その名が自我である光
それはわれわれの体の中で [1] 人生の光である。
2．自我は愛によって長い間存在するものとなる
そして [2] より多く生き　[3] より多く燃え　より多く輝やく。
3．愛によって自我の本質は炎を得る
その中で隠れた [4] 可能性の成長がある。
4．その自我の本性は愛によって火を集める
そして愛によって世を輝やかし明るくすることを学ぶ。
5．愛は剣や短剣を恐れない
[5] 愛の本質は風水火土でない。

---

[13] 毎瞬の新しい発明などで民族の生活やその存在の様子が分かる。そのすべての背景に願望がある。
[14] 心の中に願望が生じるとその獲得のため努力する様子が表われる。
[15] イクバールは 21、22、23 の対句で、知識や学芸が本来の目的から離れると、それが民族や共同体に害を及ぼすとしている。
[16] 偉大な目標を立て、その獲得のため行動せよ。
[17] 神の同意を得ようとせず、虚偽に満ち、現世的利益を追求する者。
[18] 最後の審判の日のような大混乱。
[1] それは人間に偉大な業績を完成させ、永遠の生を得させる。
[2] 偽りの力と衝突し、粉砕する。
[3] 他の人を正しい道へ案内する。
[4] 様々な力の成長。
[5] 愛は神性なもので神からの贈り物であり、物質世界とは関係がない。

6．世の中で愛は[6]休戦でもあるし[7]戦いでもある
愛の鋭い剣は命の水である。
7．[8]愛の目で固い石も砕かれた
[9]神の愛は結局　完全に愛であった。
8．[10]求愛を学び恋人を求めよ
[11]預言者ヌーフの様な目　[12]預言者アイユーブのような心を探せ。
9．おまえの一握りの土から金を産め
完全な人の戸口に口付けをせよ。
10．おまえはその灯を[13]ルーミーのように輝やかせよ
ローマをタブリーズの火で燃やせよ。
11．おまえの心の中に[14]恋人が隠れている
もしおまえが目を持っているなら来たれ　おまえに見せてやる。
12．[15]それを恋した者たちは[16]美女たちより美しく
[17]彼らは幸運でハンサムで誰よりも魅力的である。
13．心は預言者への[18]愛で強くなる
[19]土塊でさへスバル星と同じ高さになる。
14．[20]ナジドの大地も預言者の恩恵で生き生きしてきた
そして[21]その地は歓喜して天に昇った。
15．[22]ムスタファーの居場所はムスリムの心の中である
われわれムスリムの尊敬と誇りは[23]ムスタファーのお陰である。
16．[24]シナイ山は預言者の家の回りの波である
預言者の住処はカアバにとっての[25]カアバ聖殿の位置を持つ。
17．[26]永遠は預言者の時の一瞬よりも少ない
永遠は[27]預言者の存在により増加する。
18．粗末な莚（むしろ）は[28]預言者の眠りに感謝する
[29]イランの王の王冠は預言者の共同体の足下にある。
19．預言者は[30]ヒラーの洞穴を寝室に選んだ

---

(6) 神の喜びの獲得のために。
(7) 現世的で個人的なことでなく偽りの力との対決のため。
(8) 普通では可能でないことも神の僕（しもべ）はやり遂げる。
(9) 水の一滴が海に落されると海の水に混って海になるように。
(10) 愛が生じ、自分の秘密の力が分かるので。
(11) アッラーを恐れたことで有名。
(12) アイユーブは忍耐力で有名。
(13) ペルシア文学最大の神秘主義詩人（1207～73年）でイクバールに影響を与える。シャムス・ウッディーン・タブリーズとの出会いでスーフィーの境地に傾いた。
(14) 預言者ムハンマド。
(15) 預言者ムハンマド。
(16) 普通の美女には美の衰えがある。
(17) 預言者に恋する者は預言者との関係により行為にも美しさが生じ、その衰退や消滅がないので。
(18) 預言者との交流で。
(19) 人間の意。
(20) 中部アラビアのナジュド（ネジド）地方。
(21) アラブの地は預言者ムハンマドが現れる前は未開の地であった。
(22) 預言者ムハンマドの称号。
(23) ムスリムにとりアッラーに次ぐ崇拝と尊敬の対象は預言者ムハンマドである。
(24) 預言者ムーサーが啓示を受けた所。
(25) 神聖で尊敬に値する地である。
(26) 永遠も預言者の前では何の価値もない。
(27) 預言者のお陰。
(28) 宇宙のどんな物も預言者との関係を喜ぶ。
(29) サーサーン朝の王冠といえ、イスラーム共同体の前にしては価値がない。
(30) マッカの近くの山であるヒラーの洞穴で預言者ムハンマドは瞑想した。

そして共同体や法律　政府を作った。
20. 預言者の目は幾晩も眠りを欠いたままだった
その時　共同体は王の寝台で安らかに眠っていた。
21. [31] 戦いの時は預言者の剣は鉄を溶かす程だった
だが [32] 祈りの時はその目は涙で一杯になった。
22. 預言者が神に勝利の祈願をする時　[33] アーメンの言葉が剣となった
預言者の剣は [34] 王の子孫を終りにさせるものだった。
23. 預言者はこの世に [35] 新しい法を始めた
そして過ぎ去った民族の王座を止めさせた。
24. 預言者は [36] 宗教の鍵で世の扉を開けた
[37] 預言者のような者を世の母親たちの腹は産まなかった。
25. 預言者の目には高きも低きもすべて平等
[38] 自分の僕（しもべ）たちと同じ食布に座って食べた。
26. 戦闘時その [39] 高貴な御方の前に
[40] ターイー族の長の娘が捕虜となって連れて来られた。
27. その足には足枷が嵌（は）められ　頭には [41] パルダーも着けられていず
恥ずかしさの余り項垂（うなだ）れていた。
28. 預言者は少女がパルダーを着けていないのを見ると
自分の [42] チャーダルをその [43] 娘の頭に掛けてやった。
29. われわれはこのターイー族の娘よりずっと裸の状態である
[44] われわれは世界の諸民族の前でチャーダルを着けていない状態である。
30. 預言者ムハンマドは [45] 最後の審判の日　人々の罪の許しを神に取りなす御方
預言者ムハンマドはこの世でもわれらの罪を覆い隠してくれる御方。
31. 預言者の親切と厳格さは完全な慈悲である
親切は友への　[46] 厳格さは仇敵への慈悲である。
32. 預言者は敵には慈悲の扉を開いた
[47] マッカの人々には「[48] おまえたちには咎めはない」の言葉を与えた。
33. われわれムスリムは [49] 国の地理的限界は知らない
視線が二つの目の瞳で一つの光になるように。
34. [50] われわれはヒジャーズ人や中国人　イラン人である
われわれは笑う夜明けの露である。

---

(31) 偽りの力に対し聖戦（ジハード）をする時は。
(32) 請願の時は。
(33) アーメン！どうぞそうになりますように！の意。
(34) どんな人間も他を自分の奴隷にする権限はないということ。
(35) それ以前どこにもなかったイスラーム法。
(36) イスラームの宗教。
(37) ムハンマド。
(38) イスラームの特徴の一つの考え、人間の平等性を表わしている。
(39) 預言者ムハンマド。
(40) アラブのターイー族。
(41) 頭や顔を覆う布。
(42) 体に巻き付けていた布。
(43) 預言者の人間的友情と寛大さの印。
(44) ムスリムは政治的経済的に隷属と不名誉の人生を送っており、イクバールは痛みと恥ずかしさを感じていたが、それは上記の娘以上のものであった。
(45) 現世が終る終末の時、すべての人が受ける神の裁き。クルアーン第 21 章 47 節参照。
(46) 不信者には聖戦（ジハード）をして偶像崇拝を止めさせ唯一神崇拝に向かわせる。
(47) イスラーム布教の初期にムハンマドはマッカの人々より進害を受けた。後にマッカを平定したが、ムハンマドに対抗した者はその身を案じた。
(48) クルアーン第 12 章 92 節参照。
(49) 住んでいる国は違ってもすべてのムスリムはイスラーム共同体の構成員であるので。
(50) ヒジャーズや中国そしてイランで全世界の意。

35. われわれは西アラビア地方の[51]酌人の目に酔っている
世界でわれわれは[52]酒とスラーヒーの関係である。
36. 預言者は色や人種の区別をきれいに焼いた
預言者の火は[53]枯れ草や枯れ枝をきれいに焼いた。
37. [54]百の花弁（はなびら）を持つ花のようにわれわれにとり匂いは一つである
[55]この体制の魂は預言者で　預言者は一人である。
38. われわれは預言者の隠れた秘密だった
預言者が恐れず[56]叫びを上げた時われわれは現れた。
39. 預言者への愛の騒ぎがわが静かな[57]葦笛の中に起った
わが胸の中でたくさんの歌が[58]不安に震えている。
40. わたしは何と言ったらいいか　預言者の愛とは何か
預言者との別離で　[59]乾いた木が突然泣き出した。
41. ムスリムの誕生は預言者の光の出現である
預言者の[60]道の埃から多くのシナイ山が生まれている。
42. 預言者の鏡はわが[61]存在を創造した
わが朝は預言者の胸の太陽から生まれた。
43. [62]毎瞬の逸（はや）る気持の中にわが安息と不安がある
わが夕べは終末の日の朝より熱い。
44. 預言者は[63]春の雲でありわたしはその果樹園である
わが葡萄の木は預言者の雨で潤っている。
45. わたしは愛の畑に目を蒔いた
わたしは眺望の収穫を得た。
46. [64]ヤスリブの地は両世界よりもよい
幸せな町よ　そこには[65]預言者が眠る。
47. わたしは[66]ジャーミーの述べ方に魅了されている
ジャーミーの詩や文はわが弱点を直してくれる。
48. 彼は意味の溢れる詩を詠む
[67]預言者の頌詩では真珠を繋いだ様な詩となっている。
49.「預言者は両世界の本についての序文である
全世界が奴隷で　預言者が主人である」

Ⅱ
50. 愛の酒で喜びが生じる

---

(51) 預言者ムハンマドの目。
(52) 預言者のお陰で世界中のムスリムが唯一の共同体の姿を取っている。酒の入ったビンのスラーヒーが一つでその中の酒も同じであるように。
(53) 人種や血統。人間の間に優劣はない。もしあるとすれば神を畏れ敬虔な者が勝れている。クルアーン第 49 章 13 節参照。
(54) 花弁は共同体の人々で花は共同体である。
(55) この体制を動かす者は預言者である。
(56) アッラーの外に神はない、ムハンマドはその預言者であるとの叫び。
(57) 心の中に。
(58) 外に出ようとして。イクバールは預言者を愛しておりその恋に狂った気持を表わすために。
(59) マディーナの預言者のモスクの柱。預言者がそれに寄り掛からなかったので、それが泣いたという故事に基づく。
(60) 道の埃でさえ預言者の所にあることでシナイ山となれるので栄誉なこと。
(61) イスラーム共同体の存在。『ハディース』（預言者ムハンマドの言行を記録したもの。）に、もしわたし（神）がおまえ（預言者）を産まなかったとしたらこの宇宙も生まれなかったとある。
(62) 預言者に対するイクバールの気持。
(63) シリア暦 6 月。
(64) マディーナの旧名。
(65) 預言者ムハンマドの墓がある。
(66) ペルシアの著名な詩人でスーフィー（1414～92 年）。
(67) 次の 49 はジャーミーの詩から。

模倣も愛の一つの別名である。
51. [68] カーミル・ビスタームも模倣では誰もその真似は出来ない程だった
[69] 生涯メロンを食べようとしなかった。
52. あなたは恋する者か　[70] 預言者の模倣でその愛を強固にせよ
あなたの縄梯子が神を取るものとなるように。
53. しばらく心の [71] ヒラーの洞窟に止まれ
そして [72] 自分を忘れて神の方へ関心を向けよ。
54. 神で自らを強くして [73] 自我を省みよ
そして [74] 渇望の偶像の頭を割れ。
55. 愛の力によって軍隊を用意せよ
愛の [75] ファーラーンの地に顕現があれ。
56. カアバの神があなたに好意を示すように
そして [76] アッラーの代理の高い地位に就くように。

第Ⅳ章

請うことで自我は弱くなる。

1．[1] ムスリムよ　かつては獅子からも貢物を得ていたぞ
だが今は困窮の余りその性格が狐のようになってしまったぞ。
2．おまえのこの悪状態はおまえの零落のせいだ
おまえのこの苦痛のもとは [2] その病気のせいだ。
3．それは高い思考から高さを奪い
崇高な思想の蠟燭の灯を消してしまう。
4．おまえは人生の酒壺より赤い酒を飲め
おまえの [3] 資金は日々の財布より取れ。
5．[4] ウマルの様に駱駝から降りよ
他人の恩義には気を付けて気を付けて。
6．おまえはいつまで地位の物乞いなどしているのか
子供の様に [5] 竹の乗物に乗ろうとしているのか。
7．[6] 空に目を向ける性癖の人は
他人の恩義で [7] 卑しくなる。
8．他に求めることで困窮の度合いは更に惨めなものになる
物乞いは恩を被ることで更に肩身が狭くなる。
9．物乞いで自我のさまざまな部分が四散する

---

[68] ビスターム出身の預言者ムハンマドの心酔者でスーフィー、874 年没。
[69] 預言者ムハンマドがメロンをどの様に食べたか分からなかったので食べ方の真似が出来ずに。
[70] 51 でのカーミル・ビスタームのように。
[71] マッカの近くにあるこの洞窟で預言者が瞑想した。
[72] 預言者は孤独を選び瞑想に没頭した。
[73] 預言者を愛するなら預言者の真似をせよ。
[74] 物質的利益との関係を断て。
[75] 聖マッカの山岳地帯。
[76] クルアーン第 2 章 30 節参照。
[1] イスラーム共同体。
[2] 経済的・社会的に病むこと。
[3] 努力奮闘して日毎の糧は自分で集めよ。
[4] 第 2 代正統カリフ（在位 634～44 年）で預言者ムハンマドの教友。その公正さが有名。駱駝に乗っている時、ウマルは鞭を落したが駱駝から降りて自分で拾い上げたという。
[5] 二本の竹を股の下に入れ何か動物に乗っているようにして遊ぶ遊び。
[6] 高い地位に憧れる人。
[7] 恩義の虜になり身動き出来なくなる。

自我の[8]シナイ山の棗(なつめ)椰子の木は顕現を欠くことになる。
10. おまえは自分の[9]一握りの土を撒き散らすな
月の様に自分の食べ物は[10]脇腹から探せ。
11. たとえおまえの日々が苦しく不幸の虜であろうと
困難の洪水の中に投げ出されていようと
12. 自分の日々の糧を他の者の恵みの中で探すな
水の波を[11]東の泉より求めるな。
13. 預言者の御前で恥じることがないように
[12]苦しみの日となる明日(あす)の日に。
14. 月に日々の糧が太陽より届く
月の心には太陽の恵みからの[13]傷がある。
15. 勇気は[14]神に求め[15]運命とは闘え
共同体の誇りを汚すことなかれ。
16. 偶像の埃をカアバ聖殿から掃除した[16]御方
その方をアッラーはアッラーの友と呼んだ。
17. 他の人の食卓より恩を受ける者の様子は残念
他の者の恩恵のせいでその首は項垂(うなだ)れている。
18. 彼らは自分を他人の恩義で燃やしてしまった
ちっぽけな物の代りに自分の気概を売ってしまった。
19. それに対し灼熱の太陽の下　喉の乾いた人は
[17]キズルより一杯の水さえ求めようとしなかった。
20. 恥じらいの汗で額は濡れなかった
人間の姿をして生きて泥の固まりにはならなかった。
21. 大空の下　この威厳ある若者は
樅の木の様に頭を高くして歩く。
22. 零落の中にあっても気概を捨てない
その運が眠っていても確りと目を醒している。
23. [18]籠の海は火の台風である
もし自分の手で露でも得られたら素晴しいことである。
24. 男らしい気概で[19]泡の様になれ
海で引っ[20]繰り返った酒杯となれ。

---

(8) ムーサーが神の顕現を見た木。
(9) 体の意。
(10) 月が欠けていくのは自らの体を食べている意。
(11) 太陽の意。
(12) 最後の審判の日に。
(13) 科学的に見れば月は太陽より光を得ている。また月には黒点が見えるが、それは太陽から光を得ていることの恥ずかしさだとイクバールはいう。
(14) ムスリムは事を始めるに当り、神の名を唱え神佑を求める。
(15) ムスリムは運の良し悪しを天の動きに求める。
(16) 預言者ムハンマド。
(17) 預言者の一人で生命の水を飲み永遠の生命を保ち、道案内をする者。
(18) 物乞いの籠、即ち誰かの前に物乞いの手を指し出すことで多少は得られる。だが気概や威厳は焼かれてしまう。
(19) 海の上を漂っている。
(20) 泡は引っ繰り返った酒杯のようで、その中には海の水は入らない。即ち喉が乾いても海から水を得ることがなく他からの恩義を受けていない。。

第Ⅴ章

自我が愛によって強化されるとそれは宇宙の表われている力や隠れている力を支配する。

1．自我が愛により[1]強固になると
　[2]その力は宇宙を統治し始める。
2．空の[3]長老が星々で絵を描いた
　蕾が自我の枝から出てきた。
3．[4]その爪は神の爪となる
　その指で[5]月も割れる。
4．この世の闘争において[6]仲裁人となる
　[7]ダリウス王やジャムシード王もその人に従う。
5．わたしはあなたに[8]ブー・アリーの話をしよう
　インドではその人の名は有名である。
6．「古い園」を[9]聞かせる者が
　われわれに「麗しい花」について語った。
7．[10]火のような様子のこの天国の地が
　彼の衣裳の風で[11]天国の様になった。
8．その[12]スーフィー聖者の弟子が西へ行った
　彼はブー・アリーの[13]酒に酔っていた。
9．たまたまその町の長官が乗り物に乗ってやって来るところだった
　その随行員の者は奴隷と権標を持つ役人だった。
10. 先駆者が声を上げた 「馬鹿者め
　長官の行列の先頭を行く者の道を塞ぐな」
11. その托鉢僧は頭を下げて歩いていた
　自分の思いに耽って歩いていた。
12. その前解れは高慢の酒杯に酔っていた
　そしてその托鉢僧の頭を杖でたたいた。
13. 托鉢僧は長官の道から悄気返(しょげかえ)って離れた
　心は重く　悲しく憂うつそうであった。
14. 彼はブー・アリーの前に来ると嘆いた
　涙が目の監獄より溢れ出た。
15. 山に落ちる稲妻の様に
　ブー・アリーは火の洪水を起した。
16. 命の血管よりもう一つの火を吹いた
　自分の書記に命じて言った。
17.「筆を取れ　わしの命令を書け
　托鉢僧から王に書け。
18.「おまえの長官がわが僕(しもべ)の頭を殴った」

---

(1) 種々な可能性を持つ。
(2) 自我を持つ者は強力な力の持ち主となるので。
(3) 空は宇宙の始まりと共にあった。それで長老の語を使用。天の自我の中に隠れている可能性に天は星の姿を与えた。
(4) 自我が強固になるとその人の行為や言葉は神のと同じ
(5) クルアーン第 54 章 1 節参照。
(6) 自我を持つ人は。
(7) 古代の専制君主たち。
(8) インドのパーニーパット出身の神秘主義者（誕生年不明～1323 年）
(9) ブー・アリー。
(10) 偶像崇拝のインドの地。
(11) イスラームを広めた。
(12) 神秘主義の聖者。
(13) それへの尊敬と愛に浸っていた。

と言って彼は自分の命令に火を付けた。
19.「この悪(わる)の長官を呼び出せ
さもないとおまえの国を他の者にやってしまうぞ」
20. 神にまで達するこの僕(しもべ)についての手紙に
王の体の中に激震が走った。
21. その体は恐れの余り硬直してしまい
その顔は夕日のように青ざめてしまった。
22. その長官のために鎖が用意された
(14) カランダルに対しこの間違った行為の許しが模索された。
23. (15) フスローは甘い言葉で華やかな述べ方の詩人だった
その歌は宇宙の秘密の荷い手だった。
24. その内面は太陽の様に輝いていた
彼は (16) 使者として選ばれた。
25. フスローがカランダルの前でシタールを奏すると
その歌で (17) カランダルの命のガラスが溶けた。
26. 山の様に堅固であった威厳
その価値はほんの一つの言葉の歌となってしまった。
27. (18) 托鉢僧の心にメスを加えるな
(19) 自らを燃えている火に焼べるな。

第Ⅵ章

被征服民が征服者を弱体化させる方法は征服者の自我を隠れた仕方で否定させることである。

1. みなさんはお聞きになったことでしょう　昔むかし
羊や山羊が牧草地にたくさんいたことを。
2. 干し草も豊富で子羊や子山羊もたくさん産まれ
敵に襲われる心配もなかったと。
3. だが不運にも雌羊が
不幸の矢で胸が傷つくことがあった。
4. 茂みからなん匹もの獅子が出て来て
夜　山羊や羊に襲い掛ってきた。
5. 征服と統治は権力の象徴である
勝利は権力の (1) 明らかな秘密である。
6. 獅子は (2) 王の行列の太鼓を打ち鳴らした
そして山羊や羊の自由を奪った。
7. 獅子たちは狩りをする以外何も知らなかったので
その牧草地を羊の血で染めるだけだった。
8. それらの羊たちの中で一頭だけが賢く賢明であった
意識も確りしており年もいって世間を知っていた。
9. それは自分の仲間たちの状態を心配していた
獅子たちによる虐待に胸を痛めていた。
10. したがってそれは運命の変転を嘆き

(14) 世を捨てたスーフィー、ここではブー・アリーを指す。
(15) インドのペルシア語詩人（1253～1325 年）。音楽家としても有名。
(16) 王の許しを乞う手紙をカランダル即ちブー・アリーに届ける使者。
(17) カランダルの上に法悦が走った。
(18) 神の人を苦しめることはその心にメスを加えること。
(19) そのようなことをする人は自分の破滅を自ら用意することになる。
(1) 勝利は常に勢力のある方が獲得する。
(2) 王位を宣言した。

仲間たちの自由を取り戻す方策を探った。
11. 弱い人間は自分の擁護のために
困難を解決する策略を探す。
12. 隷属での困難を遠ざけるために
種々な方策の力が強くなる。
13. 復讐の狂気が高まると
奴隷の知能でも反乱を考えるのに忙がしくなる。
14. 賢い羊は言った　わが縛(もつ)れを解くのは難かしい
わが悲しみの海には岸辺がないので。
15. 臆病な羊や山羊では獅子から逃れられない
わが腕力は銀　(3) それらのは鋼鉄であるので。
16. 可能でない　説教や助言で
羊や山羊が狼の様な性質を身に付けるのは。
17. だが獅子を羊や山羊にすることは可能である
自分で自分のことを忘れさせることは可能である。
18. 賢い羊は啓示を受けた振りをした
そして血を吸う獅子たちに説教を始めた。
19. 羊は叫んだ　大嘘つきの悪党め
おまえはあの (4) 災厄の続く日を知らないのか。
20. われらは精神力に満ちているぞ
われらはおまえたち獅子のためにも (5) 神から送られて来た使者であるぞ。
21. われらは (6) 視覚を欠いた者のために光の姿でやって来たのだ
われらはイスラーム法や教令を持ってやって来たのだ。
22. (7) おまえたちはその悪業を後悔せよ
損失を重視する者よ　おまえたちの安寧と利益を考慮せよ。
23. 短気で自らの力に酔っている者は不幸であるぞ
人生の強化は自我の否定で得られるぞ。
24. 善良なる者の魂は牧草地から食料を得る
肉を捨てる者は神のお気に入りとなれるぞ。
25. 歯の鋭さはおまえを辱めの虜にするぞ
そしてそれは認識の目を盲目にするぞ。
26. 天国とは正に弱者のためのものであるぞ
力とは正に損失の原因となるものだぞ。
27. 壮観さと威厳の探究は邪悪である
貧困は富裕より良い。
28. 火を付ける稲妻は殻粒の上には落ちない
しかしもし (8) 殻粒が藁塚(わらづか)になることを望むと賢明ではない。
29. 殻粒になれ　砂漠になるな　もしおまえが賢明なら
太陽の光に与えるように。
30. 山羊や羊を殺すことを誇るおまえよ
名誉が得られるようにおまえ自身を殺せ。
31. 人生は弱く不安定にさせられる
圧迫　暴力　復讐そして権力で。
32. 草花は踏み潰されるがその度に生えて来る
そして死の眠りを繰り返し洗い流す。

---

(3) 獅子の腕力は。
(4) クルアーン第 54 章 19 節参照。
(5) 獅子を威圧するために預言者だと言う。
(6) 眼識や自覚を持たない者のために。
(7) 獅子の民族の者よ。
(8) 小さい殻粒がもしも人間のように大きくなる富を欲するなら、即ち藁塚になることを望むなら稲妻が落ち損害を受ける。

33. [9]自分について忘れよ　もしおまえが賢明なら
もし自分について忘れないなら　おまえは狂人だ。
34. [10]目を閉じよ　耳を塞げ　口を閉じよ
おまえの思考力が天まで届くように。
35. この世の[11]牧草地は何でもない
愚か者め　妄想の世界にしがみつくな。
36. 獅子の群れは一生懸命になり過ぎ疲れてしまった
心は一休みすることを欲した。
37. この眠気を起させる忠告が気に入った
その愚かさのせいで獅子たちは羊の話のごまかしの餌食となった。
38. 羊を取っていた獅子たちの群れは
羊のような[12]気性になってしまった。
39. 獅子たちは今　草を好み始めた
とうとうその獅子らしさの真珠は土器の欠けらにも満たない物になってしまった。
40. 草のせいで歯の鋭さはなくなってしまった
火花を散らした目の輝きはなくなってしまった。
41. 獅子の心は胸から出てしまった
鏡の輝きは鏡から出てしまった。
42. あの努力の熱気は残らなかった
あの行動の欲求は心に残らなかった。
43. 権力　決断力　堅忍不抜がなくなってしまった
名声　名誉　好運がなくなってしまった。
44. 鋼鉄の様な爪が脆弱になってしまった
心は死んで肉体は墓穴になってしまった。
45. 肉体の力は痩せ衰え命の恐怖は増大した
命のその恐怖は勇気の元手も奪ってしまった。
46. 勇気のなさで百の病気が生まれた
探求心の減退　臆病　意気消沈などの。
47. 目覚めていた獅子が羊の呪文で眠ってしまった
自らの堕落を文化と呼んで。

（2019 年 9 月 26 日受理）

---

[9] おまえの能力について。
[10] 今度は五感も利用するなとの忠告。
[11] 名誉や価値。
[12] 臆病。